ポーランとサルトルにおける
コミュニケーションのダイナミズム

――1940年代フランスの言語論と出版界――

竹　内　康　史

序論：ポーランからサルトルへ ―― 2人の編集者における継承と断絶

『レ・タン・モデルヌ』誌（*Les Temps modernes*）は、サルトルによってボーヴォワールやメルロ＝ポンティたちとともに構想され、1945年10月に創刊された雑誌である。同誌は文学や哲学だけでなく、人種問題から一娼婦のドキュメント記事まで幅広いジャンルを取り扱い、今日でもなお編集長クロード・ランズマンのもとで存続し続けている。

『レ・タン・モデルヌ』誌の出版元は当初、『新フランス評論』誌（*Nouvelle revue française*, 以下『NRF』誌）の刊行によって一躍名を成したガリマール社だった[1]。『NRF』誌は、とりわけジャン・ポーランが編集長を勤めていた1925年から1940年にかけてフランスの文壇・言論界を牽引したが、ナチス占領下で体制側に与した結果、第2次大戦後すぐに廃刊を余儀なくされる。ピエール・ブルデュー的批評の継承者、アンナ・ボスケッティは、『レ・タン・モデルヌ』誌の成功の一因として、この雑誌がちょうど『新フランス評論』誌（*Nouvelle revue française*, 以下『NRF』誌）の占めていた地位を引き継いだのだと指摘している[2]。仮にそうだとすれば、実存主義の華々しい登場の影で、ポーランからサルトルへという、フランス出版界における中心人物の継承がなされていたことは刮目に値する[3]。

とはいうものの、サルトル研究において、ポーランをともに論じる分析はこれまでのところ目立ったものがない[4]。その最大の理由は、ポーランが作家でも批評家でも、ましてや哲学者や思想家でもなく、編集者という従来なら文学制度の脇役的な肩書きをもっていたためだろう。本稿の目的はなによりもまず、このようなサルトル研究の空隙を埋めることにある。まさにそこにおいて、作家サルトルでも哲学者サルトルでもなく、編集者サルトルの肖像が浮き彫りになるはずであり、さらに言えば、これら2人の編集者における継承ばかりでなく、2人のあいだで生じた断

絶もまた明らかにされなければならない。

したがって本稿は、ポーランからサルトルへと時代が移行する時期、すなわち、1945年前後における2人のテクストを突き合わせることを主眼とする。主な考察対象としては、同時代性を最大限に考慮し、ポーランの文学論『タルブの花あるいは文学における恐怖政治』(*Les fleurs de Tarbes ou la Terreur dans les Lettres,* 1941, 以下『タルブの花』)[5]と、戦中・戦後におけるサルトルの批評および文学論、特に『文学とはなにか』(*Qu'est-ce que la littérature?,* 1948)[6]に至るまでのテクスト群を取り上げることとする。ただしこのようなテクストの選択は、単に同時代性のみに依拠しているわけではない。ポーランの『タルブの花』とサルトルの『文学とはなにか』には、少なくとも2つの共通点がある。第一に両テクストの初出はいずれもそれぞれが主宰する雑誌上であり、これらのテクストの性質と2人が雑誌編集という仕事に携わったという経験とを切り離して考えることはできない。第二に、両テクストはともに一見して文学論の体裁をとりながら、言語のあり方を問うことから出発している。両者の根底には、記号と意味との乖離を抜本的に検討しようとする言語論があるのである。

本稿の第二の目的は、こうした言語論、すなわち、ソシュール言語学がフランスの知識層に浸透する直前の言説と編集者の言説との関係を探ることにある。この関係の結節点には、コミュニケーションの問題があると本稿は考える。ここでいうコミュニケーションとは、単に言語行為の場にのみ関わるものではなく、共同体、より厳密に言えば文学共同体に通じるものである[7]。そこで次のような問いが立てられるにちがいない。ポーランとサルトルという2人の編集者は、文学について語るよりも前に、なぜそしてどのようにして言語について語ったのだろうか。また、編集者の言説と言語論とのあいだにおいて、コミュニケーションの問題はどのようなかたちで関係してくるのだろうか。これらの問いは単にポーランとサルトルとの思想上の争点を解明するだけにとどまらない。本稿の試みはまた、言語論の構築という知的な作業がけっして机上の仕事でのみ成立するものではなく、当時の政治・経済・社会状況と密接に結びついているということを示すものである。そしてその結びつきを考えるうえで、編集者という職種に目を向けること、また、コミュニケーションの問題を広義の意味で取り扱うことがいかに重要かということも明らかにされるにちがいない。

本論：

1．〈テロリズム（・コンプレックス）〉―― 言葉、人間学、読者（層）について

ポーランの『タルブの花』を読むためには、このテクストにおける「テロル」（Terreur）と「常套句」（lieu commun）という2つの語句の用いられ方を押さえておく必要がある。そこで本章ではまず、サルトルもしばしば引用する「テロル」という語についての考察から始めることとする。

『タルブの花』で語られる「テロル」および「テロリズム」は、圧倒的な軍事力・警察力をもつ既存の体制に対抗する際に、無差別殺人というゲリラ的手段に打って出るような現代的テロリズムを意味しない。もともと《Terreur》は、近代フランスにおいて1789年の革命直後に吹き荒れた「恐怖政治」を指していた。「恐怖政治」としての《Terreur》は、現代的テロリズムとは逆に、むしろ体制側による反乱分子の掃討、粛清を敢行するものである。そこに共通している点はただ殺戮の無差別性しかなく、この意味で現代的テロリズムは、本来の「恐怖政治」から派生した比喩の一種だと述べることができるかもしれない。

『タルブの花』の「テロリズム」もまたこの「恐怖政治」に由来している。ポーランは、革命以後の19世紀の批評家たちが文学から言葉による修辞を根こそぎ排除しようとするさまを暴き、彼らを「テロリスト」として告発した。つまり、「『テロリスト』について与え得る最も簡単な定義は言葉嫌いだ」[8]と明言されているように、『タルブの花』における「テロリスト」とは、人間の生命ではなく言語に対して無差別的な殺戮を行なう者たちなのである。したがってポーラン的テロリズムは、確かに旧来の「恐怖政治」から派生したものでありながら、一種の比喩的性質をともなうことで、「恐怖政治」とともに現代的テロリズムにも呼応するような意味合いを帯びる。要するに、比喩、転用、それがもたらす連続性とずれ[9]。言い換えれば、それは継承と断絶の問題である。ポーランとサルトルとのあいだの継承と断絶は、あらかじめポーランの言説のなかに刻印されていた、と考えることもできるのである。

以下ではこうした点を踏まえたうえで、サルトルによるポーランの受容を分析していくこととする。

（1）「テロリズム」から「テロリズム・コンプレックス」へ――言語的存在としての人間

1943年12月、ジャン＝ポール・サルトルは、同年に刊行されたジョルジュ・バ

タイユ『内的体験』(*L'Expérience intérieure*) に対する書評「新しい神秘家」(《Un Nouveau mystique》) のなかで、「彼〔バタイユ氏〕が標榜するのは神秘家の憎悪なのであり、テロリストの憎悪ではないのである」[10]と述べている。この憎悪は「言語全体 (le langage tot entier)」に向けられたものであり、したがってここで言われる「テロリスト」はジャン・ポーランが用いる意味と呼応する。なぜなら、ポーランこそが『タルブの花』という著作のなかで「テロリスト」と「言葉嫌い (misologue)」を結合させた張本人だからである。

サルトルは「新しい神秘家」において、神秘家バタイユの言葉嫌いについて論じていくが、テロリストの言葉嫌いについては一切説明をしない。だとすれば、テロリスト的な言葉嫌いをわざわざもち出してくること自体が蛇足的だとさえ言える。このようにポーラン的な意味での「テロリズム」を補足的にのみ利用する傾向は、サルトルにおいて、1943年2月のカミュ論のなかですでに顕著であり[11]、これらをあえて好意的に見るなら、サルトルによるポーランへの一種強引なオマージュだとも考えられるかもしれない。

ところが、サルトルはポーランの言う「テロリズム」をそのままのかたちで引用するという一線を次第に踏み越えていく。つまり、このオマージュは手放しの敬意ではなくなり、踏襲、迎合、継承といったものからはみ出すのである。本稿はそこにサルトルにおける変節の契機を見出す。

この変節の契機については、順を追って検討しなければならない。サルトルは、自ら筆を執った「『レ・タン・モデルヌ』誌創刊の辞」(《Présentation des *Temps modernes*》, 1945, 以下「創刊の辞」) のなかでもまた「テロリズム」という語を用いている。

> (……) 彼〔文筆家〕は、彼を読まない労働者たちの前で劣等感のコンプレックスを感じる。(……) ポーランがテロリズムと名づけたものの起源にあるのは確かにこのコンプレックスであり、シュルレアリストたちが生活の糧とした文学を軽蔑するようにさせたのもこのコンプレックスである[12]。(強調サルトル)

また『文学とはなにか』にも、「(……) ポーランがテロリズムと名づけた文学現象、(……) テロリズム、あるいはむしろテロリズム・コンプレックスと呼ぶべきかもしれない」[13] (*QL*〔3〕157/146頁) というような類似的な記述が見られる。ポーランが表立って「コンプレックス」という語を用いた形跡はない。にもかかわらず「創刊の辞」以後のサルトルにおいては、「テロリズム」から「テロリズム・コンプレックス」への微妙な修正が施されているのである。そして、この修正こそがサ

ルトルにおける変節の契機の試金石となるのである。

では、この微妙な修正は一体なにを意味しているのだろうか。第一に注目したいのは「コンプレックス」という語が精神分析の用語だということである。精神分析に対するサルトルの関心は、『存在と無』(*L'Être et le néant*, 1943) の終盤において〈実存的精神分析〉が予告された時期の前後に具体的なかたちをもち始めた[14]。そして〈実存的精神分析〉は、戦前の諸書評やジュネ論やフローベール論に代表されるように評伝という形式を遵守することで、理論から実践へと移されていく。書くサルトルとともに読むサルトルがそこにはいる。すなわち、読者の目線から作家の「コンプレックス」を明るみにしていくことが〈実存的精神分析〉の骨格をなしていたと換言してよい。

こうして問題なのは言葉ではなく、それを扱う作家という人間、その人間の人生全体となる。『文学とはなにか』でのサルトルは、そうした自らの姿勢を「人間学的 (anthropologique)」(*QL* 〔3〕169/149 頁) と呼び[15]、人間抜きの文学、人間の生身の活動なしの言語などあり得ないとする考え方を表明した。そこでは人間が言語的存在として規定されている。したがって「コンプレックス」という語が、サルトルにおける言葉の問題から人間の問題への移行、さらには言語的存在としての人間の規定を示唆している点をまず念頭に入れておく必要がある。

(2) 批評家という「読者」、来るべき「読者層」

第二に目を向けてみたいのは、「創刊の辞」からの引用によると、テロリストたちの身振りとシュルレアリストたちの身振りが、同じ「コンプレックス」という語に撞着するとされている点である。なるほど、「新しい神秘家」から引いた先の引用では、「神秘家」(シュルレアリスト) と「テロリスト」とを区別することに比重が置かれているように解釈することもできる[16]。しかし逆に言えば、両者がともに言語に対する「憎悪」を有している点では変わりがなく、そこにおいてシュルレアリストとテロリストは同一の範疇に投げ込まれることになる。

くり返すが、ポーランもまたサルトルと同様に、テロリストたちの言葉嫌いを批判していた。しかしポーランの批判の矛先は、シュルレアリストではなく、アントワーヌ・アルバラ (1856-?)、レミ・ド・グールモン (1865-1915)、マルセル・シュオブ (1867-1905) 等といった今日では聞き慣れない 19 世紀の文筆家たちだった[17]。ポーランは彼らを作家ではなく批評家とみなし、さらに書く人間でもあるこの批評家を終始「読者 (lecteur)」と呼び続ける[18]。つまり、ポーランにとって「読者」とは、文学作品を読むだけでなく、半ば作家と同じように文壇に属している専門的な

文筆家でもあるのである。これに対してサルトルの関心は、さしあたり作家にあるといえるだろう。〈実存的精神分析〉が評伝というかたちで取り組んでいたのは作家としてのジュネやフローベールに他ならなかったし、サルトルにとっての「テロリスト」もまた批評家という読者ではなく、作家としてのシュルレアリストだった。

しかしながら、サルトルが読者という存在に対してまったく無関心だったわけではない。実際、『文学とはなにか』第2章は全体を通して作家と読者との関係について紙幅を割いている。先取りして言えば、サルトルはそこでポーランとは異なった読者のありようをむしろ積極的に提示しているのである。

では、サルトルにとっての読者とはなにか。そこで再び「テロリズム・コンプレックス」についての分析に戻り、「創刊の辞」の「(……) 彼〔文筆家〕は、彼を読まない労働者たちの前で劣等感のコンプレックスを感じる」という記述に着目する必要がある。この「コンプレックス」は「労働者たち」という読者の不在によって招かれる後ろめたさに根ざしている。そしてそこから、文学そのものの自滅が到来するとされる。『文学とはなにか』では、『タルブの花』からの別の引用をともないながら、20世紀初めの文学状況について次のように指摘されている。

> (……) それ〔文学〕はもはや読者層をもっていない。「誰でも知っているように」とジャン・ポーランは書いた。「われわれの時代には二つの文学がある。本来読むに絶えぬ悪しき文学(それが多く読まれているが)と、読まれない良き文学」と[19]。(*QL*〔4〕157/145頁)

この一節は微妙な分裂をはらんでいる。ポーランの引用はあくまでも作家の供給と読者の需要との忌まわしき乖離を悲嘆している。しかしその直前にあるサルトルの一文は、『文学とはなにか』の別のところで「われわれには読者個人はあるが、読者層がない」[20] (*QL*〔4〕244/231-232頁) とよりはっきりと明示されているように、読者自体のあり方を問うものにすり替わっているのである。

ポーランにとっての読者は、既述したように、名前をもった批評家個人を指していた。ポーランは先に列挙したアルバラたちの他にも、サント＝ブーヴやテーヌからベルクソン、フロイトに至るまで数多の読者を一人一人取り上げている。これに対して、サルトルは「労働者たち」を読者として想定している。そこでは「労働者たち」と複数形で示されているように、読者を大雑把なかたちで把握しようという試みがなされている。つまり、サルトルにとって問題なのは「読者」ではなく「読者層」なのである。そしてさらに言えば、この「労働者たち」はさしあたり読まない者たちであり、もしこう言ってよければ来るべき不特定の読者層に他ならない。

サルトルのこうした姿勢は、戦後、『レ・タン・モデルヌ』誌の主幹になってからいっそう明確に述べられるようになっていく。「創刊の辞」以後のサルトルは、ポーランよりも巨視的な目線で文学市場を見渡そうとしていると言い換えてもよい。そして、この目線こそが、『文学とはなにか』における作家と読者の関係論（第2章）から読者と読者層の問題（第3・4章）への推移に対する看取を可能とするのである。

＊　　＊

以上の問題点を整理してみると、「テロリズム」から「テロリズム・コンプレックス」への軌道修正によって、サルトルの関心が言葉から作家という人間に移っていくことと同時に、サルトルによる読者の捉え方そのもののマクロ化および来るべき読者層に対する開拓精神が言い含められていることがわかる。前者は言語論に関わるものであり、後者は文学市場のあり方に関わるものである。サルトルはそこでポーランを援用しているかのように見せかけながらも、じつは転用を試みているのである。

また、サルトルはそこにおいて作家に執着を示すとともに、読者層にもまなざしを向けているというふうにも整理できよう。このことは作家対読者という図式のもとでは矛盾しているかもしれない。しかしながら本稿は、サルトルとポーランをともに、作家でも読者でもなく、編集者として捉え直す視座への立脚によって、このような矛盾の可能性を斥ける。

ポーランがこれまで、なによりもまず『NRF』誌の編集長として目されてきたという事実についてはいうまでもない。他方、サルトルを編集者として位置づけることが可能となるのは、サルトルが『レ・タン・モデルヌ』誌の編集に携わって以降である。サルトルは「創刊の辞」のなかで、多種多様な原稿を幅広く募集しているが、その一方で、「アンケート」の企画を大々的に発表している[21]。こうした統計学的な視座の採用は、『文学とはなにか』第4章において、俯瞰的な視点からなされる読者層の調査にも通底する（*QL*〔4〕265/251-252頁）。また、「創刊の辞」や「文学とはなにか」とともに『シチュアシオンII』に併録されている「文学の国営化」（《La Nationalisation de la littérature》）では、ある程度の市場原理を容認したうえで、作家が職業作家として自立するように促されている[22]。この時期のサルトルは、『文学とはなにか』第4章においてマス＝メディアへの積極的な介入を提唱していたことからもわかるように（*QL*〔4〕265-268/252-255頁）、文学を商業的な角度から見る目を確実に養っていたのである。

ただし本章で確認したように、仮にサルトルとポーランが編集者的な立場を共有していたと考えられるにしても、2人のあいだには看過されがちな、と同時に決定

的な相違がある。そしてこの相違は、ポーランの言う「テロリスト」が誰に対しても適用可能だというところからすでに端を発している。言い換えれば、「テロリスト」というレッテルは、ちょうどナチスの側にもレジスタンスの側にも当てはめることができるように、ある種の反転可能性をそれ自身のうちに含意している。確かにこうした反転可能性は、あらゆる語句において少なからず潜在しているものであろうが、その行間に対立的な様相が濃厚であればあるほど顕在化しやすい。そしてサルトルによる変節の契機が生じたのも、まさにこのためなのである。

とはいうもののまさに同時に、次のような疑問が生じていることも認めなければならない。サルトルはポーランと異なった見解を提示するにあたって、意識的にせよ無意識的にせよ、なぜポーラン的テロリズムをあえて転用するという回りくどい振る舞いに及んだのだろうか。おそらくこの問いは、サルトルが言葉から人間へ、また、読者から読者層へという2つの移行を述べた背景には、具体的に言って、ポーランのいかなる言語論およびいかなる編集者としての言説があったのか、という問いにもつながってくるにちがいない。なぜなら、2人の争点が整理されないまま、サルトルの奇妙な所作を解明することなど到底あり得ないからである。

2．2つのコミュニケーションのダイナミズム —— 常套句と翻訳の問題をめぐって

サルトルの『文学とはなにか』第3章は、フランス文学史を作家と読者との社会的関係の変遷という観点からたどり直している点、そしてとりわけフランス革命以後の文学の荒廃を訴えている点で、ポーランの『タルブの花』の議論構成と酷似している。ポーランはそこで、常套句や修辞の価値を見直し、慎重かつ暗示的なやり口によって、17世紀以前の古典主義的な文学のあり方への回帰を模索している。こうした回帰やそれにともなう常套句の価値づけ直しの試みは、サルトルにおいてけっして好意的に受け止められてはいない。というのも、サルトルが理想的な文学環境としているのは、17世紀の古典主義ではなく、18世紀の啓蒙主義だからである。サルトルにとって、「18世紀は歴史のなかで唯一の幸運な時代であり、フランスの作家にとっては、やがて失われるべき楽園だった」[23]（*QL*〔3〕105/101頁）とされる。つまり、18世紀の作家たちは、それ以前の内輪向けの読者（中世にあっては聖職者集団、17世紀にあっては社交界の貴族）ではなく、貴族階級とブルジョワ階級という「読者層のうちに2つの敵対者」[24]（*QL*〔3〕105/101頁）を見出し、この両者に対して同時に呼びかける環境にあり、このため、文学空間の閉鎖性のくびきを初めて脱することができたとされるのである。

したがってサルトルは、『文学とはなにか』において17世紀における文学状況を素描しながら、次のように常套句を非難せざるを得ない。

> 〔17世紀には〕散文家も詩人でさえも呪われていない。作家が各々の作品で文学の意味と価値を決定する必要もまったくない。なぜなら、この意味と価値は伝統によって固定されているからである。(……) 一言で言えば、彼らは古典的作家である。実際、古典主義が存在するのは、社会が比較的安定したかたちをとり、その社会が永遠に続くという神話を確信していたときである。つまり、(……) 政治的・宗教的イデオロギーの力が強くその禁止事項が厳格であるために、いかなる場合にも思想の新しい領域を発見することは問題にならず、エリートによって採用された常套句にかたちを与えることだけが問題であるとき (……) である[25]。(*QL*〔3〕98-99/96頁、強調サルトル)

ここで「常套句」を強調しているのはサルトル自身である。この強調の意味は、ポーランという固有名が付されていない以上、おそらく『タルブの花』の読者でなければまずもって汲み取ることのできないものである。つまり、あえてポーランの名前を出すことなくなされたポーラン批判なのである。サルトルはそこで、17世紀と1940年代後半における時代状況や時代認識の明白な相違を理由に、常套句が古典主義の時代においてのみ有効に働くものだと述べている。要するに、17世紀の「安定した」社会は文学空間を構造上、閉鎖的なものにとどめてしまっていた。このような想定を1940年代のフランスに当てはめることは、必然的に文学雑誌のセクト化を招くことになりかねないのである。

前章で確認したように、サルトルはポーラン的テロリズムについてはたびたび言及していた。しかし、『タルブの花』のもうひとつの要点ともいえる「常套句」という語句については、ここで挙げた一例を除けば一転してまったく触れられていない。もちろん、「常套句」という言葉が「テロリズム」や「テロル」ほどスキャンダラスなものでない以上、サルトルの感性に響いてこなかったのだと考えればそれまでだろう。しかしながら仮にそうだとしても、これ以上踏み込んだ議論を求めないとしてしまうには、「常套句」と「テロル」との引用数の不均衡があまりも不自然なのもまた確かなのである(実際、後述するブランショのポーラン論ではこの不均衡は解消されている)。サルトルにとって、「常套句」は、本当に17世紀と現代との時代的ギャップを示すだけの単なる指標のようなものすぎないのだろうか。

そこで以下では、この「常套句」という言葉がポーランの『タルブの花』においてどのような奥行きをもっているのかを突きとめ、その奥行きにおいてサルトルの

テクストを再検討することから議論を再開する。そこでは、「常套句」(lieu commun)が、文学史や修辞という文学的問題はもとより、この語句がもつ〈場〉(lieu)の問題、ひいては空間の問題がもたらすポリティクスとも結びつくものであるということを肝に銘じておかねばならない。そしてまさにそこにおいて、サルトルとポーランが結果的に見解の相違を示すにせよ、2人の問題意識の出発点が同じ地平にあるということが明らかにされるだろう。

（1）「常套句」を通して見る文学史と言語論

「常套句」という語句が『タルブの花』において示唆するのは、第一に文学史に関わる問題、第二に言語論に関わる問題である。

第一にポーランは、常套句の復権によって古典的な文学のあり方の再興を目指そうとする一方で、19世紀以降の、すなわち、ロマン主義以降の文学状況を批判していく。ロマン主義批判という点については、本章の冒頭でも述べたように、サルトルもまた歩調を合わせている。マイケル・サイロティンスキーは、ポーランとモーリス・ブランショとのあいだの継承と断絶を扱った論文のなかで、ヴァンサン・デコンブを引用しながら、このような近代文学に対する批判が1930年代から40年代にかけてフランスの知識人層のなかで広まっていた新しいヘーゲル解釈、とりわけヘーゲルの歴史観についての批判的な見方に起因するものだと指摘している[26]。このヘーゲルを系譜の軸とする見地は、当時のフランスにおけるヘーゲル研究の第一人者、アレクサンドル・コジェーヴによって示されたものであり、ヘーゲルによって肯定的に受け止められたフランス革命とナポレオンの登場を、逆に批判的に〈テロル〉の時代の始まりとして位置づけたことを特徴とする。ポーランたちはこうした1930年代の歴史観を受けて、フランス文学史の再構築に適用しようとしたのである。

第二にポーランによれば、文学におけるテロリストたちは、意味・思考・観念の伝達を脅かす限りにおいて言葉の存在を嫌悪するとされる。言葉は一般的に意味や思考を伝える手段だと考えられているが、この伝達において誤解や阻害をもたらすのもまた言葉そのものだからである。こうして、ポーランはテロリストたちの声を代弁して、「常套句を用いる作家は言葉の力・言葉主義・言語の影響力等々に屈しているのである」[27]と述べることになる。つまり、テロリストにとっての常套句が、意味や思考を歪曲・矮小化し、その純粋さを脅かす「言葉の力や言葉主義」を反映したものに他ならないとポーランは考えていたのである。

端的に言えば、ポーランは意味・思考の側と言葉・記号の側を二分し、テロリストたちによって必要以上に貶められた言葉・記号の地位を回復しようとしたという

ことになる。サルトルもまた『文学とはなにか』第1章において、言葉における意味的側面と記号的側面を峻別したうえで（*QL*〔1〕17/19頁）、後者に散文家のアンガジュマンの使命を課し、この文学論の骨子とした。したがって、記号としての言葉の価値づけ直しという点で、2人の目論見は軌を一にしていたと言えるだろう。

ところがポーランは、記号作用のアンガジュマンをもっぱら議論の軸とするサルトルとはちがって、意味の側と記号の側の中間にとどまろうとし続ける[28]。そもそもポーランは、修辞を語るにあたって、なぜ隠喩、換喩、擬人法といったより一般的な技法ではなく、殊更に常套句に力点を置く必要があったのだろうか。「常套句」(lieu commun）は、仮にこの語が示すとおりに従うなら、ひとびとの共有する場、もしこう言ってよければコミュニケーションの場と規定することができる。言ってみれば、ひとびとの思想や意味を歪曲化して伝えるものであるどころか、むしろそれらを表情のように一挙に伝えるものなのである[29]。仮に皺の動きのひとつひとつ、細まった目、開いた唇、紅潮した頬が常套句を構成する一語一語であるとすれば、常套句はまさにそうした細部をあえて分析していかなくても一瞬で捉えられる笑顔に等しいものだといえる。それは記号と意味のあいだの壁を瞬時にして跳び超えることである。したがって常套句は、テロリストにおいて思考と言葉、意味と記号における優劣の決定を促すものであったのとは逆に、ポーランにとっては両者を架橋するものとして要請されたものだったと考えられるのである。

（2）「常套句」共同体――文学空間と庭園というトポス

常套句を通して『タルブの花』の読者の前に開けてくるのは、ひとつにはテロリストと修辞家がくり広げる新たな近代フランス文学史であり、もうひとつにはそこから引き出されるポーラン独自の言語論だった。特に後者に関して言えば、「常套句」という語句をコミュニケーションの場として取り上げることで、単に反テロリスト的ではないポーランの議論を見出すことができた。この議論は、『タルブの花』の表題およびこのテクストの構成との関わりを探ることによって、じつはさらなる問題を提出するものとなる。

『タルブの花』という表題は、タルブ庭園の花（fleur）が摘み取られることと文学における修辞（fleur）が蹂躙されることとの類比を示唆している。そしてポーランは、庭園の花があらかじめ「手に花をもたずにこの公共庭園に入るべからず」[30]という逆説的な立て札によって守られ得るように、文学における修辞、ひいてはその核とされる常套句もまた、それ自身が新参の作家や批評家によってたえず刷新され続けることによってのみ維持され得るとする。すなわち、「常套句とはいつでも、いかに陳腐なも

のであれ、それを述べる者によって発明されたものとなり得る（……）」[31]のであり、したがって、常套句において意味と記号が乖離しないように、「常套句を共通のものとする」[32]弛まぬ努力が要求されるのである。

花と庭園のこうしたパラドクスは、たとえば現代芸術の否定性を分析したイタリアの思想家ジョルジョ・アガンベンが指摘するように[33]、興味深いものではあるが、本稿はここであえて視点をずらし、2つの点を指摘することとする。第一に目を向けてみたいのは、ポーランが文学空間を庭園にたとえたということそれ自体である[34]。公共の庭園は権利上、そこを訪れたいと願うすべての人間たちに向けて自由に開かれているが、事実上、そこにはさまざまな制約や暗黙の規約が存在している。そしてなにより、庭園は天然の平原とはちがって、人工的に固定された有限の空間である。文学もまた同様に、権利上、誰しもに開かれたものでありながら、一定の知的水準をもった任意の国語で書かれているがゆえに、そこには言語的・教育的な壁が立ちはだかっていることをゆめゆめ忘れてはならない。つまり、ポーランによって示される読者が批評家である以上、これらの壁は必要以上に高く設定されているのであり、その読者とはフランス知識人層のごく一部を指しているにすぎないのである。

『タルブの花』はこのようにして、文学空間と庭園との開放性と閉鎖性を同時に言い含んでいる。なるほど、ポーランが文学空間の開放性と同時に閉鎖性を促すとしても、サルトルが暗に批判したように、そこには完全に17世紀的・社交界的な自己完結したコミュニケーションが思い描かれているわけではない。ポーランは実際、『タルブの花』のなかで、「すべての人間が自分自身と交わすコミュニケーション、すなわち反省」[35]を揶揄し、自己完結的なコミュニケーションのあり方を斥けている。したがって、ポーランが新たにフランス文学界へと入ってこようとする作家や批評家を拒んでいるというわけではけっしてない。常套句というコミュニケーションの場に精通している限りにおいて、彼らはむしろ歓迎される。そしてこう言ってよければ、外部から内部へという求心的なコミュニケーションのダイナミズムによって、「常套句」とそれが支えるフランス文学の存続は長く保障されるはずだという見通しをポーランは示しているのである。

第二に注目したいのは、庭園に立て札を立てる者が果たして誰なのかということである。この人物は庭園を管理する者であり、文学空間のマナーを取り仕切るものである。言い換えれば、庭園に来訪する者たちよりも以前に庭園に存在する者であり、作家や批評家たちが文章を書くよりも以前に文学空間に君臨している編集者である。そして、『タルブの花』においてこの立て札を打ち立てるのはポーラン自身に他ならない。

このように見てくると、ポーラン的編集者は、作家や批評家に先立って、フランス文学という空間における外部から内部へという求心的なコミュニケーションを推進しようとしている者であることがわかる。こうした背景には、大恐慌とそれに続くブロック経済にともなって内向きに閉塞化した経済状況に比例して、次第に内輪向きに凝固しかけていた1930年代のフランス文学に対するポーランの不満と危惧があったとも考えられる。少なくともその時代にあっては、1920年代パリのコスモポリタン的ともいえる空気は消失しつつあった。

こうしてポーランは文学空間の風通しを少しでも改善し、ある意味で外部を巻き込んだコミュニケーションのダイナミズムのなかにその改善の手立てを見出そうとする。しかしながら、彼の頭のなかにあるのは、依然としてフランス文学に他ならず、結局のところ庭園内部の花々だけなのである。あえて極言するなら、庭園の外でいかに多くの花が摘み取られ枯れ果てようとも、それはポーランの関心の埒外だったのではないだろうか。

（3）ポーランの翻訳論――ポーラン的編集者と求心的コミュニケーション

ポーランは確かにフランス文学の外部にも目を向けていなかったわけではない。しかしそこには、この外部が内部へと求心的に回収されるという条件がついている。

モーリス・ブランショは、1941年、『タルブの花』に対する書評のなかで次のように指摘している。「ポーランは、この書物〔『タルブの花』〕にこそ収録しなかったが、構想的にはその延長線上にある論考『鏡映しの花嫁』のなかで、翻訳を適切に研究すれば、真正な思考に行き着く方法を明らかにできるだろうと述べている」[36]。この「鏡映しの花嫁」が『ムジュール』誌（*Mesures*）1938年4月号に掲載されたのは、『タルブの花』が『NRF』誌に掲載された約2年後のことである。端的に言うなら、この論考は〈自分を見ること（se voir）〉の不可能性を追求している。ポーランによれば、「人間は自分のうなじや首を直接見ることがないように無垢な精神を捉えることがない」[37]のと同様に、自らの思考とそれを言い表わす言葉との一致をじかに見出すことができない。そこには超越的な障壁が存在する。こうして、直接的にではなく間接的に〈自分を見ること〉、すなわち、鏡を介して見ることが要請され、この鏡映しが言葉においては翻訳の問題とされる。ポーランはそこで、思考とそれを反映する言葉とのつながりを見ることをやめ、言葉とそれに対応する別の言葉とのつながりを見るのである[38]。

こうしてポーランが論じる対象は、複数の言語に精通した翻訳家に向けられる。注目すべきことに、ここで言われる翻訳家は、『タルブの花』における批評家と同

様に、書くと同時に読む人間であり、「ある種の教育」[39]が課せられるべき文学業界人である。そしてポーランは、まさにこの翻訳家という存在に焦点を当てることによって、文学空間に立ち入る者すべてに多言語使用を義務づけようとするのである。

ただしこの高邁な理想には、とりわけ翻訳済みのテクストの受容者の多くに対して、そしておそらく、読者層として把握されるべき大衆層に対して一種のパラドクスをもたらす。要するに、彼らは通常、原文で書かれた言語が読めないから翻訳に頼るのであって、双方の言語に精通しているのであればあえて翻訳を読む必要はないのである。もちろん、思考と言語のつながりよりも言語と言語のつながりを検討することのほうが、言語の問題に対してより踏み込んだ取り組みであるとする立場にはそれなりに説得力があるだろう[40]。しかしポーランの掲げる理想と翻訳の受容の実状との隔たりがあまりにも大きいのもまた確かなのである。そしてこの隔たりは、ポーランがあくまでも翻訳することに力点を置き、翻訳されることには考え及びしないことによっていっそう浮き彫りとなる。そこで想定される文学作品は任意の読者層の外部から内部へと輸入されるものであって、内部から外部へと輸出されるものではない。要するに翻訳の問題においても、ポーランが求心的なコミュニケーションという枠内で語り続けていると述べざるを得ないのである。

以上のように『タルブの花』を読みたどったことで、「常套句」という言葉が、19世紀以来続いてきた意味と言葉との乖離を解消したいとするポーランの言語論と、求心的コミュニケーションによってフランス文学の地位の回復に努めようとする編集者ポーランの言説との結節点となっていることを確認できた。一方、ここで本章の冒頭に立ち返ってみるなら、サルトルは「常套句」という語句のなかに、17世紀的なエリート主義の文学空間とコミュニケーションのあり方を見出し、批判していた。いまやこの批判が、サルトルにおける言語の問題と、また、編集者サルトルが打ち立てるコミュニケーションのあり方とどのように結びついているのかについて検討しなければならない。

（4）外国人に向けて語ること――サルトル的編集者と遠心的・媒介的コミュニケーション

サルトルが常套句を批判する『文学とはなにか』第3章では、「常套句」（lieu commun）のうちの《commun》と共鳴するような一節がある。

> 仮に一枚のレコードがプロヴァンやアングレームの夫婦の日常会話をコメントなしにわれわれへと向けて再生されるとすれば、われわれはそれをまったく理

解しないだろう。そこにはコンテクストが欠けているからである。つまり、共有する（communs）思い出や共有する（communes）感覚、夫婦の状況や計画といったものが欠けているのである。要するに、話し手それぞれが相手にどう見えるかを知っているような世界に、われわれが住んでいないということである。読書もまた同様である。同じ出来事を生き、同じ問題に直面するか同じ問題を避けてきた、同じ時代・同じ集団の人々は、口のなかに同じ味を感じている（……）[41]。（*QL*〔3〕76-77/76-77 頁、強調サルトル）

ジャック・デリダはのちに、サルトルのテクストにおける「同じ味を感じ」ることに言及し、〈私〉が世界とのあいだでその都度交わす特異なつながりとしての経験や、舌（langue）という身体部位への着眼から、言語（langue）と味覚との関わり合いについて考察している[42]。いずれにせよ、この「味」の問題はそこで、「コンテクスト」や「共有する」ものという問題と結びつくことによって、コミュニケーションの条件、あるいはまた、コミュニケーションの痕跡を示している。そして、「レコード」という機械は、まさにこのコンテクストの欠如をもたらすものとされ、「時代」や「集団」、すなわち、時間的・空間的な隔たりを跨ぎ越すものとなる。

サルトルはそこから、フランスにおける第二次世界大戦の生々しい体験を、それを体験していない者、しかも外国人であるアメリカ人にいかにして伝えるかという具体的な事例へと議論を発展させる。「もし私がアメリカの読者層に対してドイツによる占領を物語るとすれば、多くの分析や用心が必要であろう。私は先入観・偏見・伝説を払いのけるために 20 頁を費やすかもしれない」[43]（*QL*〔3〕76/76 頁）。

共有していない体験を言葉によって共有するためには、質的にも量的にも「多くの分析や用心が必要」とされる。いみじくもこの時期は、サルトルがスペイン内乱からナチス進撃までの時期を描いた未完の長編小説『自由への道』（*Les chemins de la liberté, I, II, 1945, III, 49*）の執筆の只中にあった。仮にこの小説が世界に向けて発信されるとしたらどうだろうか[44]。つまりサルトルにとって、フランスという内部からアメリカという外部へと発信されるとしたらどうだろうか。そこで直面するのは文化的・歴史的差異に他ならないとサルトルなら考えるはずである。しかし、サルトルはこうした差異に目を向けていながら、もう一方の差異、つまり、言語的差異には言及しようとしない。フランス語で小説を書くサルトルがアメリカ人という読者層に向けて語りかけるということは、明らかに言語的差異という垣根を越えるための翻訳という手続きが不可欠となってくるはずである。にもかかわらず、サルトルの関心は外国語の問題を通り越して、外国人に向けて語ることにもっぱら注がれる。

ここで少なくとも2つの問題点を取り上げなければならない。第一に顕著なのは、前章でも確認したように、サルトルが言語から人間へと視点を移行させているということである。こうした移行は、逆に言えば、言語と人間との分離不可能性、さらには言語的存在としての人間のあり方を暗示しているが、一見して目につくのは問題の比重の差が歴然としているということだろう。戦後のポーランはまさにこの意味において、『ラ・ターブル・ロンド』誌（*La Table ronde*）1950年11月号に寄せた短い論考のなかで、次のようにサルトルを批判したのである。「サルトルはかつて一度だけ言語の諸問題について述べた。(……)〔しかし、〕サルトルの熱意と誠実な諸努力に反して、言語は一度として問題とされていないのである」[45]。

ポーランは最終的にサルトルを「テロルの奇妙なケース」[46]と呼ぶ。なぜなら、サルトルは同時代の言語哲学者ブリス・パランについての分析を通じて、当初は語用論的アプローチという言語の問題に着眼しておきながら、その後「道徳」や「倫理」といった問題、こう言ってよければ人間のあり方そのものに関わる問題へと議論を転じてしまうからである[47]。サルトルは確かにそこにおいて「他者」の問題がパランに欠けていると述べ、倫理的な言説を紡ぎ出している。そしてサルトルのこうした倫理的な手つきは、『文学とはなにか』にも引き継がれ、外国語という言語の問題ではなく外国人に向けて語ることという問題の前景化を許すのである。ポーランが『タルブの花』の延長線上で翻訳の問題、すなわち、外国人ではなく外国語の問題に取り組んでいるのとは対照的である。

しかしながら、サルトルはけっして言語の問題を置き去りにしているわけではない。少なくとも『文学とはなにか』第3章の後半部は、フランス文学史を――「コミュニケーション」の手段としての――識字率の普及という見地から再構築しようとしているのである。この試みは、ポーランが「鏡映しの花嫁」において文学と教育とのつながりを説いたことと似通っているが、厳密にはまったく別様である。それは、ポーランが高度の多言語使用をスローガンとしていたのに対して、サルトルが問題としているのは最低限の読み書き能力の獲得だということである。したがって、サルトルがポーランほどに言語の問題に拘泥しないように見えるのは、その拘泥によって、サルトルが将来的に読者層として想定している労働者や外国人たちとサルトル自身との距離がますます開いてしまうことを極力回避しようとていたためだとも解釈できるかもしれない。

第二に、外国人に向けて語ることという問題は、ポーランの翻訳論とはまったく逆の視座の導入を可能にする。ポーランがあくまでも文学の輸入について考えていた一方で、サルトルは文学の輸出について論じている。それは言ってみれば、フランス文学の内部から外部へという遠心的なコミュニケーションの提言に他ならない。

そしてまさにここに2人の編集者像の分水嶺がある。つまり、戦前のポーランがフランス国内における文学の危機の打開に腐心していればよかったのに対し、戦後のサルトルはもはやそのような立場にさえ安住することが許されなかった。アメリカ文化が、荒廃したヨーロッパを尻目にますます台頭してきていたために、サルトル的編集者はフランスの外へと目を向けざるを得なかったのである。

＊　　＊

サルトルは外国人に向けて語ることを通じて、内部から外部へという遠心的なコミュニケーションというあり方を示した。とはいうものの、サルトルがけっして外国人だけに向けて語ろうとしているわけではないということには注意しなければならない。サルトルはアメリカ人に向けて語ることに続いて、「もし同じ主題についてフランス人に向けて書くとすれば、われわれは仲間である。たとえば、『公共庭園の音楽堂でのドイツ軍楽隊のコンサート』と述べればすべてがわかるはずである」[48]（*QL*〔3〕77/77頁）と述べている。

また本章の冒頭でも示唆したように、18世紀の作家たちは貴族階級にもブルジョア階級にも属しきらずに、両者に「寄生（parasite）」（*QL*〔3〕89/88頁）する者として定義され、この双方に向けて対話の呼びかけを行なう。この2つの読者層はいずれも作家にとって外部的である。そしてこのことは、サルトルの同時代状況にも該当するとされる。「それ〔抑圧階級〕と被抑圧階級とでコミュニケーションをなすことはもはや媒介なしには不可能である」[49]（*QL*〔4〕245/232頁）。まさに冷戦が幕開けしようとしている時代にあって、作家に要請されるのは、ブルジョワとプロレタリア、白人と黒人といった対話の困難な2つの集団にあいだにあって中立的な交渉役を引き受けることなのであり、先の引用について言えば、正確にはフランスという内部とアメリカという外部という2つの方向に向けて語ることが論じられようとしていたのである。

そこでは、内部から外部へではなく、外部から別の外部へというコミュニケーションの別のあり方が示されている。前章で確認したように、戦後のサルトルはポーランとは一線を画した編集者的な立場に立って、個々の読者ではなく来るべき不特定の読者層という捉え方を披瀝していた。一方、いまや浮かび上がってくるのはこの読者層そのものの複数化である。サルトルが読者を他者として定義していることにならうとすれば、サルトルの述べるコミュニケーションの先には、〈読者層〉という複数の他者とこの〈読者層〉の複数化という2つの〈多／他者（autre(s)）〉が存在していることになるだろう。そしてこのコミュニケーションのあり方を可能にしているの

は、他ならぬ「媒介（intermédiaire)」としての編集者の存在なのである。

結論と今後の研究課題：

このように見てくると、本稿に残された目下の課題はサルトルにおける「媒介」の問題であるように思われる。実際、この「媒介」の問題はサルトルのテクストだけを扱って済むものではない。サルトルは、本稿でも取り上げたパラン論のなかでこの「媒介」について取り組んでいる。そしてパランに対する言及は、ブランショやポーランによっても積極的になされており、しかもそれぞれの言及は密接に結びついている[50]。したがって「媒介」に視座を移すと同時に、サルトル、ブランショ、ポーランといった面々のテクストをパランを軸にして議論を組み立て直す必要が出てくるである。そのためにはどうしても改稿は避けられない。

「媒介」への着眼は、〈私〉と他者との関係を一対一で考えていく枠組みを解体し、まさにもうひとつの他者の項を導入することで、〈私〉を主体としてではなく２つの他者をつなぐ媒介として見つめ直すことに他ならない。したがってサルトルの他者論を主体主義的に捉えるような一般的理解はここにおいて解体される。もちろん、こうした第三項の導入は、フロイトがエディプス・コンプレックスにおいてすでに示しているように、けっして目新しいものではない。しかし重要なのはこうした第三項の導入そのものではなく、この「媒介」の問題がどのような問題と関わっているのかということである。

その意味で本稿の試みは、第一に、単に「媒介」の問題を設定するための準備をしたのではなく、むしろこの「媒介」が「コミュニケーション」の運動性の問題とつながっている限りにおいてでしか意義をもたないということを示したものだと言えるだろう。本稿は、サルトルとポーランのテクストを対照させることを通して、ポーランにおいては求心的なコミュニケーションを、そしてサルトルにおいては遠心的・媒介的コミュニケーションを確認した。ここで最も重要なのは、サルトルの視点とポーランの視点との優劣を決定することではなく、それぞれのコミュニケーションがすべて内部と外部をめぐるダイナミズムとして提示されているということである。ポーランは求心的なコミュニケーションについて述べたのであって、自己完結的なコミュニケーションに執着していたわけではない。したがって「媒介」について考える際には、あらかじめ設定された３つの項をいかにして結合させるのかという点に着目するよりも前に、コミュニケーションのダイナミズムがいかにして「媒介」を生み出すのかという点に目を向けなければならないのである。

第二に指摘しておきたいのは、今日の文学状況を見渡すとき、求心的・遠心的・

媒介的といったコミュニケーションのあり方を別個のものとして捉えたり、ひとつに絞って論じたりすることは不可能だということである。言語コミュニケーションの運動の方向性はけっして一元化できないものであり、文学制度における輸出入の問題もまた同様に一様なものとして考えることはできない。今日の文学をめぐる環境は、多メディア化、情報技術の革新、グローバル化とローカル化等の一般的傾向を考慮に入れるだけでも、サルトル的編集者とポーラン的編集者をつねにともに要請するのである。

第三に本稿は、サルトルとポーランを対照するにあたって、言語論、編集者のあり方、また文学作品の輸出入や戦後のアメリカとフランスについて言及することで、思想的・経済的・政治的といった多角的な観点から考察を試みた。この試みは突き詰めるところ、「文学とはなにか」という問いかけそのものと関連づけることができる。

ポーランは『タルブの花』のなかで「文学とはなにか」という問いかけが「稚拙でありながらも一生かかっても切り抜けられない」[51]ものだと記している。サルトルが『タルブの花』を読んだことが明らかな以上、直接的であれ間接的であれ、『文学とはなにか』という表題の着想をポーランのこの記述から得た可能性はけっして払拭できないだろう。この問いかけは確かに、文学の本質を追求する限りにおいて確かに稚拙であり陳腐でさえある。しかしサルトルはこの問いを、別の問いへとずらすことで応答しようとするのである。そして本稿の試みはこの応答を忠実に追跡するものである。『文学とはなにか』の構成は、第1章で言語論（「書くこととはなにか」）、第2章で作家と読者とのコミュニケーション論（「なぜ書くのか」）、第3章と第4章で同時代の文学をめぐる編集者サルトルの戦略（「誰のために書くのか」）が述べられることで成り立っており、本稿はまさにこの構成をひとつのシークェンスとして捉える。従来のサルトル研究は、『文学とはなにか』を各章に分断し、とりわけテクストの序盤の分析に力を注ぐことで独自の議論を展開してきた。このため、そこでの言語論的問題に脚光が当てられても、サルトル的編集者の言説については見過ごされてきた。しかしながら「文学とはなにか」という問いかけを「一生かかっても切り抜けられない」ものとするためには、この問いに部分的に答えるのではなく、サルトルが提示してみせたように、この問いをさまざまなかたちに変容させ続けたうえで、そうした問い相互のつながりをもまた問うことが不可欠なのである。

主要参考文献

（※本稿の翻訳は、既訳を参考としつつも、原則として筆者自身によるものである。また引用のページ数の表記は、右側の数字が原典テクストのページ数、左側の数字が翻訳テクストのページ数とした。）

1）欧語参考文献

ジョルジョ・アガンベン『中味のない人間』岡田温司／岡部宗吉／多賀健太郎訳、人文書院、2002年。

Georges BATAILLE, *L'Expérience intérieure*, Gallimard, 1954（ジョルジュ・バタイユ『内的体験――無神学大全』出口裕弘訳、平凡社（平凡社ライブラリー）、1998年）.

Émile BENVENIST, *Problèmes de linguistique generale*, Gallimard, 1966（エミール・バンヴェニスト『一般言語学における諸問題』岸本通夫監訳／河村正夫他訳、みすず書房、1983年）.

Maurice BLANCHOT, *Faux Pas*, Gallimard, 1943（モーリス・ブランショ『踏みはずし』神戸仁彦訳、村松書館、1978年）.

――――, *La Communauté inavouable*, Éditions de Minuit, 1983（モーリス・ブランショ『明かしえぬ共同体』西谷修訳、筑摩書房（ちくま学芸文庫）、1997年）.

Anna BOSCHETTI, *Sartre et "les Temps modernes": une entreprise intellectuelle*, Éditions de Minuit, 1985（アンナ・ボスケッティ『知識人の覇権：20世紀フランス文化界とサルトル』石崎晴己訳、新評論、1987年）.

Jacques DERRIDA, 《《Il courait mort》 Salut, salut. Notes pour courrier aux *Temps Modernes*》, *Les Temps modernes*, 1996. 3-5, pp. 7-54（「『彼は走っていた、死んでもなお』やあ、やあ――『レ・タン・モデルヌ』への書簡のための覚え書き」梅木達郎訳、クロード・ランズマン編『レ・タン・モデルヌ50周年記念号』緑風出版、1998年、12-76頁）.

Gille DELEUZE, Felix GUATTARI, *Mille plateuax*, Éditions de Minuit, 1980（ジル・ドゥルーズ／フェリックス・ガタリ『千のプラトー』宇野邦一他訳、河出書房新社、1994年）.

Luc FERRY, Alain RENAUT, *La pensée 68, Essai sur l'anti-humanisme contemporain*, Gallimard, 1985（リュック・フェリー／アラン・ルノー『68年の思想』小野潮訳、法政大学出版局、1998年）.

Nik Farrell FOX, *the new SARTRE*, Continuum, 2003.

Jean-François LOUETTE, *Jean-Paul Sartre [portraits littéraires]*, Hachette, 1993.

Maurice MERLEAU-PONTY, *Phénomenologie de la perception*, Gallimard, 1945（モーリス・メルロ＝ポンティ『知覚の現象学』（1・2）竹内芳郎／小木貞孝共訳、みすず書房、1967・74年）.

Jean-Luc NANCY, *La Communauté désœuvrée*, Christian Bourgois Éditeur, 1999（ジャン＝リュック・ナンシー『無為の共同体』西谷修／安原伸一朗訳、以文社、2001年）.

Brice PARAIN, *Recherches sur la nature et les fonctions du langage*, Gallimard, 1942（ブリス・パラン『言葉の思想』島唯義訳、大修館書店、1972年）.

Jean PAULHAN, *Les fleurs de Tarbes ou la Terreur dans les lettres*, Gallimard, 1990[1er, 1941].

――――, *Petite préface à toute critique*, Le Temps qu'il fait, 1988[1er, Éditions de Minuit, 1951].

――――, *Œuvres Complètes tome III*, Cercle du Livre Précieux, 1967.

Stephen PRIEST ed., *Jean-Paul Sartre: Basic Writings*, Routledge, 2001.

Jean-Paul SARTRE, *L'Être et le néant*, Gallimard, 1943（『存在と無』（上・下）松浪信三郎訳、人文書院、1999年〔＊旧訳版1956年〕）.
————, *L'Existentialisme est un humanisme*, Nagel, 1946（『実存主義とは何か』伊吹武彦／海老坂武／石崎晴己訳、人文書院、1996年〔＊旧訳版1955年〕）.
————, *Situations I*, Gallimard, 1947（『シチュアシオン I』佐藤朔他訳、人文書院、1965年；「新しい神秘家」の翻訳については、下記『哲学・言語論集』の清水徹訳を参照）.
————, *Situations II*, Gallimard, 1948（『シチュアシオン II』加藤周一／白井健三郎訳、人文書院、1964年）.
————, *Qu'est-ce que la littérature?*, Gallimard[Collection Folio Essais], 1948（ジャン＝ポール・サルトル『文学とは何か』加藤周一／白井健三郎／海老坂武訳、人文書院、1998年）.
Michael SCRIVEN, *Sartre and the media*, St. Martin's Press, 1993.
————, *Jean-Paul Sartre : Politics and Culture in Postwar France*, St. Martin's Press, 1999.
Michael SYROTINSKY, "Noncoincidences: Blanchot Reading Paulhan", Thomas PEPPER ed., *The Place of Maurice Blanchot* (YFS 93), Yale University Press, 1998, p. 81-98.
Alain RENAUT, *Sartre, Le dernier philosophe*, Grasset, 1993（アラン・ルノー『サルトル、最後の哲学者』水野浩二訳、法政大学出版局、1995年）.
ドミトリイ・S・リハチョフ『庭園の詩学』、坂内知子訳、平凡社、1987年。
Pierre VERSTRATEN etc., *Autour de Sartre: Littérature et philosophique*, Gallimard, 1981.

2）邦語参考文献

①単行本

市倉宏佑『ハイデガーとサルトルと詩人たち』日本放送出版協会（NHKブックス）、1997年。
石崎晴己編『いま、サルトル』思潮社、1991年。
石崎晴己／澤田直編『サルトルの遺産』日本サルトル学会・青山学院大学、2001年。
澤田　直『〈呼びかけ〉の経験——サルトルのモラル論』人文書院、2002年。
————『新・サルトル講義——未完の思想、実存から倫理へ』平凡社（平凡社新書）、2002年。
ジャン＝ポール・サルトル『哲学・言語論集』白井健三郎／清水　徹／野田又夫／多田道太郎／矢内原伊作／鈴木道彦／海老坂武訳、人文書院、2001年。
末次　弘『サルトル哲学とは何か』理想社、2002年。
竹内芳郎／鈴木道彦編『サルトルの全体像——日本におけるサルトル論の展開』新泉社、1969年。
土田知則／神郡（青柳）悦子／伊藤直哉『現代文学理論——テクスト・読み・世界』新曜社、1996年。
西谷　修『離脱と移動——バタイユ、ブランショ、デュラス』せりか書房、1997年。
三宅芳夫『知識人と社会——J＝P・サルトルにおける政治と実存』岩波書店（現代社会学選書）、2000年。
渡辺幸博『哲学の現在——サルトルからポスト構造主義へ』関西大学出版部、1993年。

②雑　誌

『現代思想』（特集「追悼：サルトル——ある時代の終焉」）1980年7月号、青土社。
『現代思想』（特集「サルトル以後のサルトル」）1987年7月号、青土社。

『理想』（特集「サルトル・今」）2000年665号、理想社。

③主要論文・雑誌記事等

荒木正純「コミュニケーション変換」『ホモ・テクステュアリス――二十世紀欧米文学批評理論の系譜』法政大学出版局、1997年、105-136頁。

内田　樹「『文学はいかにして可能か？』のもうひとつの読解可能性――《面従腹背》のテロリズム」『佛文論叢』東京都立大学、1988年、3-58頁。

竹内芳郎「アンガジュマン文学の言語論的再検討（上）（中）（下）」『思想』1972年569-571号、岩波書店、1429-1439／1697-1709／71-81頁。

谷口佳津宏「サルトルにおけるアンガジュマンの誕生」『アカデミア：人文社会学編』南山大学、1998年、21-54頁。

ジャック・デリダ／生方淳子＋港道隆（インタビュアー）「自伝的な“言葉”」『現代思想』1987年7月号、青土社、58-81頁。

三宅芳夫「来るべき幽霊、或いはデリダとサルトル」『現代思想』1999年3月号、青土社、198-217頁.

安原伸一朗「どこにでもいる人の常套句――ジャン・ポーランの民主主義」『言語態』第3号、言語態研究会、2002年、48-58頁。

注

1　ただし、サルトルとアンドレ・マルローとの不和が原因で、『レ・タン・モデルヌ』誌の版元は1948年にジュリヤール社へと変更された。

2　Anna BOSCHETTI, *Sartre et "les Temps modernes": une entreprise intellectuelle*, Minuit, 1985, p. 187（アンナ・ボスケッティ『知識人の覇権：20世紀フランス文化界とサルトル』石崎晴己訳、新評論、1987年、281）. そこでは、『クリティック』誌（*Critique*）、『エスプリ』誌（*Esprit*）、『ヌーヴェル・クリティック』誌（*Nouvelle critique*）と『レ・タン・モデルヌ』誌との相関関係についてもまた詳述されている。

3　*Ibid.*, p.177 : La présence de Paulhan dans le comité de réduction et le choix de Gallimard comme éditeur indiquent certes que le nouveau dominant est dans une position de succession et de continuité par rapport au passé du champ（同掲書、268頁：編集委員にポーランが加わっており、版元としてガリマール社が選ばれたことは、いかにも新たな支配者が、この領界の過去に対して継承と連続の立場にあることを指し示している）.

4　サルトルとメディアに関する研究は進んでいるが、そこにおいてもポーランに対する言及は見当たらない。その原因の背景には、サルトルが編集者としてメディアに臨んでいるという姿勢があまり評価されてこなかったということがある。たとえばマイケル・スクリヴァンは、ボスケッティとは異なり、サルトルと『レ・タン・モデルヌ』誌の関係よりも、サルトルが多様な雑誌・テレビ・ラジオに寄稿・出演したことのほうを重視している。確かにスクリヴァンの研究は、サルトルが戦後、飛躍的にメディアとの関わりを拡大・強化したことを明らかにしているが、と同時に、このことは『レ・タン・モデルヌ』誌創刊がサルトルとメディアとの関わりにとって大きな節目だったということも示唆している。詳しくは以下を参照：Michael

SCRIVEN, *Sartre and the media*, St. Martin's Press, 1993.

5 『タルブの花』の初出は1936年、『NRF』誌6月号から10月号において、分割連載されたものであるが、単行本版とはいくつかの異同がある。ただし本稿は、サルトルによるポーランの言及が単行本出版以降となっていることから、雑誌連載時のテクストに配慮しつつも、原則として単行本版を参照することとする。

6 『文学とはなにか』の初出は、『レ・タン・モデルヌ』誌1947年2月号から7月号にかけての連載. ただし、『タルブの花』と同様、『文学とはなにか』についても、原則として単行本版を参照することとする。

7 詳しくは以下を参照 : Jean-Luc NANCY, *La Communauté désœuvrée*, Christian Bourgois Éditeur, 1999（ジャン＝リュック・ナンシー『無為の共同体』西谷修／安原伸一朗訳、以文社、2001年）; Maurice BLANCHOT, *La Communauté inavouable*, Éditions de Minuit, 1983（モーリス・ブランショ『明かしえぬ共同体』西谷修訳、筑摩書房（ちくま学芸文庫）、1997年）. そこでは、コミュニケーションが（神的なものとの）合一（communion）や共産主義（communisme）、さらには共同体（communauté）といった《commun》を共有する語群と共鳴させられている。また、これらのテクストの議論を踏まえ、サルトルにおけるコミュニケーションとその乗り越えについて論じた以下の拙稿も参照 :「共同体的〈コミュニケーション〉と間接的〈伝令〉――サルトル『文学とはなにか』のシークェンス」、西村靖敬編『20世紀文学・芸術・思想とその諸相』千葉大学大学院社会文化科学研究科、2004年、73-95頁).

8 FT 75/76頁 : La définition la plus simple que l'on puisse donner du Terroriste, c'est qu'il est *misologue*.

9 しばしば解釈の問題につきまとうこうした連続性とずれは、以下の文献にならって〈変換〉と呼ぶことも可能だろう : 荒木正純「コミュニケーション変換」『ホモ・テクステュアリス――二十世紀欧米文学批評理論の系譜』法政大学出版局、1997年、105-136頁。

10 *SI* 136/24頁 : c'est la haine du mystique, qu'il [M. Bataille] revendique, non celle du terroriste.

11 *SI* 103/92頁 : [...] il faut que nous ayons été mis d'abord en contact avec la réalité ou avec une de ces circonstances. Mais pour établir ce contact, M. Camus [...], ne dispose que de mots et de concepts; il lui faut décrire avec des mots, en assemblant des pensées, le monde avant les mots. La première partie de *L'Étranger* pourrait s'intituler, comme un livre récent, *Traduit du Silence*. [...] M. Paulhan y verrait certainement un effet du terrorisme littéraire（われわれは最初に、現実やこれらの〔不条理な〕情況のひとつと接触を結んでおかねばならなかった。しかし、この接触を打ち立てるために、カミュ氏は（……）言葉と概念しか使えない。彼は、言葉以前の世界を、思想をかき集めながら、言葉によって描き出さねばならない。『異邦人』の第1部は、最近のある著作のように、『沈黙からの翻訳』と題することが可能かもしれない。（……）ポーラン氏なら、確実にそこに文学的テロリズムの一効果を見るかもしれない)。ちなみに、『沈黙からの翻訳』は、第一次世界大戦の従軍によって不具となった作家ジョエ・ブスケの日記 : Joë BOUSQUET, *Traduit du Silence*, Gallimard, 1980 [première édition, Les Cahiers du journal des Poètes, 1941].

12 Jean-Paul SARTRE,《Présentation des *Temps modernes*》, *Situations II*, Gallimard, 1948, p. 11: [...] en face des ouvriers, qui ne le lisent pas, il [l'homme de lettres] souffre d'un comlexe d'infériorité

[...]. C'est certainement ce complexe qui est à l'origine de ce que Paulhan nomme *terrorisme*, c'est lui qui conduisit les surréalistes à mépriser la littérature dont ils vivaient.（ジャン＝ポール・サルトル「『現代』誌創刊の辞」『シチュアシオン II』加藤周一／白井健三郎訳、人文書院、1964 年、8 頁）.

13 ce phénomène littéraire que [...] Paulhan nomme terrorisme, [...] Le terrorisme ou plutôt le complexe terroriste [...].

14 〈実存的精神分析（la psychanalyse existentielle）〉については、『存在と無』第 4 部第 2 章「〈為す〉と〈もつ〉(Faire et Avoir)」の第 1 節「実存的精神分析」のなかで理論化されている：SARTRE, *L'Être et le néant*, Gallimard, 1943, pp. 643-663（サルトル『存在と無』（下）松浪信三郎訳、人文書院、1999 年〔旧訳版 1956 年〕、1025-1053 頁）. サルトルによれば、フロイト的な精神分析とは夢・錯誤・強迫観念・神経症などを分析の対象とし、コンプレックスを無意識におけるリビドーによって規定する試みだと定義される。これに対して、実存的精神分析は無意識の存在そのものを認めない. 実存的精神分析の目標は、「人間の諸々の経験的振る舞いを解読」（*Ibid*, p. 656 : de *déchiffrer* les comportements empiriques de l'homme）（同掲書、1043 頁、強調サルトル）し、「始原的な選択（le choix originel）」を見出すことにあるとされる。この「始原的な選択」は、当人にとって認識されはしないが、生きられた意識のうえでなされたものであり、したがって、コンプレックスも無意識ではなく意識に属するものと規定される。サルトルは次のように述べている：*Ibid*, p. 660 : [...] la psychanalyse existentielle n'a pas à remonter du《complexe》fondamental, qui est justement le choix d'être, jusqu'à une abstraction comme la libido qui l'expliquerait. Le complexe est choix ultime, il est choix d'être et *se fait tel*（同掲書、1049 頁：実存的精神分析はまさに存在することの選択に他ならぬ根本的な『コンプレックス』から、それを説明するリビドーというような抽象にまで遡る必要はない。コンプレックスは究極の選択である。コンプレックスは存在することの選択であり、自らをそのようなものとする）（強調サルトル）.

15 《anthropologique》という語を「人類学的」ではなく「人間学的」と訳したのは、『文学とはなにか』のこの第 2 章が一方でカント論として展開されているためである。また人間学あるいは人間主義の問題が、1945 年 10 月にクラブ・マントナンで行なわれた講演『実存主義とは人間主義（ユマニスム）である』（*L'Existentialisme est humanisme*, 邦題『実存主義とは何か』）において顕著であるという点も忘れてはならない。従来、この講演は、『嘔吐』や『存在と無』に見られる反人間主義的な言及からの転向としてしばしばみなされてきた。しかし本稿は、この「人間主義」を「人間学的」という意味、つまり、人間に対する根本的な関心という広義の意味で捉えることによって、それがサルトルにおいて終生一貫したものであると解釈する。その関心は、具体的に少なくとも 2 つの特質をもっている。第一に、サルトルの人間主義は――人間主義の歴史的な発端とも関係するが――反キリスト教的であり、すなわち、神に対置されるものとしての人間を考えることを基盤にしている。第二に、それは、細分化された人文科学（文学・哲学・言語学・心理学・社会学等）を人間そのものから遊離させることのないようにつなぎとめることを目的としている。本稿はこの第二の点をより前景化させ、人間抜きの文学あるいは人間なしの言語に対してこのうえなく批判的なサルトルを素描するものである。なお、後期サルトルにおける人間学の関心については以下を参照：SARTRE,《L'anthropologique》, *Situations IX*, Gallimard, 1972, pp. 83-98（サルトル「人間科学（アントロポロジー）について」海老坂武訳、『哲学・言語論集』人文書院、2001 年、209-224 頁）。

16 サルトルは「新しい神秘家」のなかで、バタイユについて、ニーチェ主義者、社会学者、神なき時代の神秘家などの側面を見ると同時に、シュルレアリストとしての側面も重ね見ている。もちろん、バタイユとブルトンの対立関係などから推察されるように、バタイユをシュルレアリストと定義する見方には一般に異論の余地があるだろう。ただし、本稿が問題とするのはあくまでも、サルトルがバタイユをどうみなしていたかである。ちなみに、サルトルは『文学とはなにか』でも依然として、バタイユを「シュルレアリストのチャンピオン」(*QL* 〔4〕296/282 頁：Ce champion du surréalisme) と目している。

17 こうした 2 人の相違は、1943 年 2 月の「『異邦人』解説」のなかで示されており (*SI* 98/87 頁)、「テロリズム」から「テロリズム・コンプレックス」への移行とは必ずしも合致しないが、少なくともこの移行を準備するものとして解釈することができる。

18 サルトルの「文学の国営化」(《La Nationalisation de la littérature》, *Situations II*, pp. 31-54) というテクストにおいて、《lecteur》は「批評家」ではなく「校正」という意味で用いられている。「校正」はいわば作家が作品を出版する以前にいる編集人のひとりであり、この意味で、作品以前に位置している。こうして見ると、ポーランにおける編集者（作品以前にいる者）と批評家（作品以後にいる者）の位置づけは、サルトルにおいて、完全に転倒させられてしまっていると同時に、《lecteur》はいずれにせよ文学業界に関わる狭い意味での「読者」として提示されていることになる。したがって、本稿は《lecteur》に対して《auteur》ではなく、むしろ《public》を対置させるような読み方を示すことに議論の有効性を見出すのである。

19 [...] elle [la littérature] n'a même plus de public : 《chacun sait, écrit Paulhan, qu'il y a de nos jours deux littératures : la mauvaise, qui est proprement illisible (on la lit beaucoup); et la bonne qui ne se lis pas》. ちなみに、ポーランの原文は FT 32/18 頁 : chacun sait qu'il y a, de nos jours, deux littératures: la mauvaise, qui est proprement illisible (on la lit beaucoup). Et la bonne, qui ne se lis pas.

20 nous avons des lecteurs, mais pas de public. また、本稿脚注 18 を参照。

21 *SI* 30/22 頁.

22 *SI* 33/27 頁. また、QL 〔4〕 232/220 頁も参照 : C' [écrire]est exercer un métier（書くこととはひとつの職業を果たすことである）.

23 Le XIIIe siècle reste la chance, unique de l'histoire, et le paradis bientôt perdu des écrivains français.

24 les deux fractions ennemies de son public.

25 Ni le prosateur n'est maudit, ni même le poète. Ils n'ont point à décider à chaque ouvrage du sens et de la valeur de la littérature, puisque ce sens et cette valeur sont fixés par la tradition [...]; en un mot ils sont classiques. Il y a classicisme en effet lorsqu'une société a pris une forme relativement stable et qu'elle s'est pénétrée du mythe de sa pérennité, c'est-à-dire [...] qu'il ne s'agit en aucun cas de découvrir des terres nouvelles à la pensée, mais seulement de mettre en forme *les lieux communs* adoptés par l'élite [...].

26 Michael SYROTINSKY, "Noncoincidences : Blanchot Reading Paulhan", Thomas PEPPER ed., *The Place of Maurice Blanchot* (YFS 93), Yale University Press, 1998, p. 83.

27 *FT* 57/52 頁 : c'est que l'auteur de lieux communs cède à la puissance des mots, au verbalisme, à l'emprise du langage, et le reste.

28 安原伸一朗は、この点について、『タルブの花』の続編として構想された『言葉の恵み』(*Le Don*

des langues）を併せて掘り起こすことで、「『タルブの花』の全体像を眺めるならば、問題なのは、文学における恐怖政治に対するレトリックの称揚という単純な反動なのではなく、レトリックに潜む罠におちいり、言葉と思考との関係に潜む新たな錯覚を抱いてしまうもう一方の文学思潮に対する批判でもある」（安原伸一朗「どこにでもいる人の常套句――ジャン・ポーランの民主主義」『言語態』第3号、言語態研究会、2002年、56頁）という分析結果を導き出している。『言葉の恵み』は、ポール・ヴァレリー、アラン、ジュリアン・バンダといったポーランに言わせれば反テロリスト的な文筆家たちを批判し、彼らが生み出す20世紀の新たな「言葉主義」のために常套句が空洞化することに対して危惧を示している。

29 Maurice MERLEAU-PONTY, *Phénomenologie de la perception*, Gallimard, 1945, p. 155（モーリス・メルロ＝ポンティ『知覚の現象学』(1) 竹内芳郎／小木貞孝共訳、みすず書房、1967年、223頁）. そこにおいて、「表情（physionomie)」は、世界が〈私〉に対して一挙に開示する意味を示唆している。したがって「表情」は、仮にサルトルの言語観に移し替えてみるとすると、記号の側ではなく意味の側に属するものと考えられる。同様の意味で、ポーランにとっての常套句が過剰に無駄な言い回し等を排除するものとして要請されたとすれば、それは〈言葉主義〉の象徴であると同時に、意味の側にも属していることになる。本稿はまさにこの意味において、常套句が結果的に思想・意味の側にも、言葉・記号の側にも完全に組み入れられていないと述べるのである。

30 *FT* 167/191頁 : IL EST DÉFENDU D'ENTRER DANS LE JARDIN PUBLIC SANS FLEURS À LA MAIN.

31 *FT* 95/102頁 : Pour banal que soit un lieu commun, il peut toujours avoir été inventé par qui le prononce [...].

32 *FT* 143/163頁 : *faire communs* les lieux communs.

33 ジョルジョ・アガンベン『中味のない人間』岡田温司／岡部宗吉／多賀健太郎訳、人文書院、2002年、15-21頁.

34 ドミトリイ・S・リハチョフ『庭園の詩学』坂内知子訳、平凡社、1987年。リハチョフは、中世からロマン主義時代に至るまでのヨーロッパ、とりわけロシアにおける庭園のイコノロジーを諸様式に応じて分析・分類している。彼の分析の対象から現代が外されてあるのは、他でもなく、イコノロジーを下支えする神学的・古典的教養が衰えたためである（12頁）。同様のことは、ポーランは述べている〈常套句〉についても当てはまるだろう。

35 *FT* 135/153頁 : la communication de tout homme avec lui-même: la réflexion.

36 Maurice BLANCHOT, 《Comment la littérature est-elle possible?》, *Faux Pas*, Gallimard, 1943, pp. 100-101（モーリス・ブランショ「文学はいかにして可能か」、『踏みはずし』神戸仁彦訳、村松書館、1978年、116頁）: Au cours d'un essai qu'il n'a pas réuni à son livre, mais qui en prolonge le dessein, *La Demoiselle aux miroirs*, Paulhan remarque qu'une étude convenable de la traduction révélerait une méthode pour aller jusqu'à la pensée authentique. 「文学はいかにして可能か」の初出は、1941年10月21日と11月25日の『ジュルナル・デ・デバ』紙（*Le Journal des Débats*）である。このテクストは、翌年、ジャン・ポーランの手によって、ジョゼ・コルティ書店から限定3000部で上梓されたという。その後、批評集『踏みはずし』に収録された。このテクストの成立と暗号性については以下の文献を参照 : 内田樹「『文学はいかにして可能か？』のもうひ

とつの読解可能性――《面従腹背》のテロリズム」、『佛文論叢』東京都立大学、1988年、3-58頁。

37 PAULHAN, 《La Demoiselle aux miroirs》, *Œuvres complètes tome III*, Cercle du Livre Précieux, 1967, p. 176 : L'homme ne saisit pas plus son esprit *intact* qu'il ne voit directement sa nuque ou son cou.

38 ポーランは、この言葉とそれに対応する別の言葉とのつながりを「二重化（redoublé）」と呼ぶ（*Ibid.*, p. 182）.

39 *Ibid.*, p. 182 : une certaine éducation.

40 Gille DELEUZE, Felix GUATTARI, *Mille plateuax*, Editions de Minuit, 1980, p. 97（ジル・ドゥルーズ／フェリックス・ガタリ『千のプラトー』宇野邦一他訳、河出書房新社、1994年、98頁）. ドゥルーズたちによれば、ある人間（または動物や昆虫でも構わないのだが）が内面のメッセージを表現・伝達することが言語の本質的な機能ではない。耳にしたそのメッセージを新たに別の第三者へと〈聞き伝え（ouï-dire）〉で伝令する機能こそが重要なのである。したがってドゥルーズたちの見地では、言語は2人ではなく3人以上の関係においてしか成立し得ないことになる。こうした考え方は〈媒介〉を論の帰結とする本稿の立場を下支えするものである。

41 A supposer qu'un disque nous reproduisît sans commentaires les conversations quotidiennes d'un ménage de Provins ou d'Angoulême, nous n'y entendrions rien: il y manquerait le *contexte*, c'est-à-dire les souvenirs communs et les perceptions communes, la situation du couple et ses entreprises, bref le monde tel que chacun des interlocuteurs sait qu'il appraît à l'autre. Ainsi de la lecture: les gens d'une même époque et d'une même collectivité, qui ont vécu les mêmes événements, qui se posent ou qui éludent les mêmes questions, ont un même goût dans la bouche [...].

42 Jacques DERRIDA, 《Il courait mort》 Salut, salut. Notes pour courrier aux *Temps modernes*》, *Les Temps modernes*, 1996. 3-5, pp. 27-32（ジャック・デリダ「『彼は走っていた、死んでもなお』やあ、やあ――『レ・タン・モデルヌ』への書簡のための覚え書き」、クロード・ランズマン編『レ・タン・モデルヌ50周年記念号』、梅木達郎訳、緑風出版、1998年、35-42頁）. デリダはそこでまた、〈味わうこと〉における世界との特異なつながりの問題が、サルトルにおける「絶対(absolu)」という概念と関連をもつ点も示唆している。この「絶対」は、主体の単独性を打ち立てるものではなく、世界内存在としての主体と世界とのつながりのひとつひとつ、その都度その都度の単独性を含意しているものである。

43 Si je raconte l'occupation allemande à un public américan, il faudra beaucoup d'analyses et de précautions ; je perdrai vingt pages à dissiper des préventions, des préjugés des légendes.

44 実際、『自由への道』第1・2部は、（『文学とはなにか』がフランスで発表された）1947年にエリック・サットン（Eric Sutton）によって英訳され、ニューヨークとロンドンでペンギン社から刊行されている。ちなみに、戦前の代表作『嘔吐』（*La Nausée*, 1936）の英訳は66年まで俟たなければならず、この点から言っても、アメリカにおけるサルトルの本格的な移入は戦後になってからと考えるのが一般的である。

45 PAULHAN, 《Jean-Paul Sartre n'est pas en bons termes avec les mots》, *Petite préface à toute critique*, Le Temps qu'il fait, 1988[1er, Éditions de Minuit, 1951], p.82 : Jean-Paul Sartre s'est une fois pour toutes prononcé sur les problèmes du langage.[...] malgré la bonne volonté, les loyaux efforts de Sartre, il n'y est pas une fois question de langage. この論考の雑誌掲載時の表題は、《Jean-Paul Sartre est en mauvais termes avec les mots》.

46 PAULHAN, *Op. cit.*, p. 101 : Etrange cas de Terreur.

47 *SI* 220/3 頁．また以下の文献も参照 : Brice PARAIN, *Recherches sur la nature et les fonctions du langage*, Gallimard, 1942（ブリス・パラン『言葉の思想』島唯義訳、大修館書店、1972 年）.

48 Si j'écris du même sujet pour des Français, nous somme entre nous: il suffit de ces mots, par exemple: 《un consert de mousique militaire allemande dans le kiosque d'un jardan public》, tout est là.

49 On[la classe d'oppression] ne peut plus communiquer avec elle[la classe opprimée] sans intermédiaire.

50 たとえば、ブランショは批評集『踏みはずし』（*Faux pas*, 1941）において、ポーラン論の直後でパランについて論じており、それぞれの論を言語をめぐる同じ問題の枠組みのなかに位置づけている。また本稿でも述べたように、ポーランはサルトルのパラン論を足がかりにして、サルトル批判を展開している。

51 *FT* 38/26 頁 : enfantine, mais que toute une vie se passe à esquiver.